

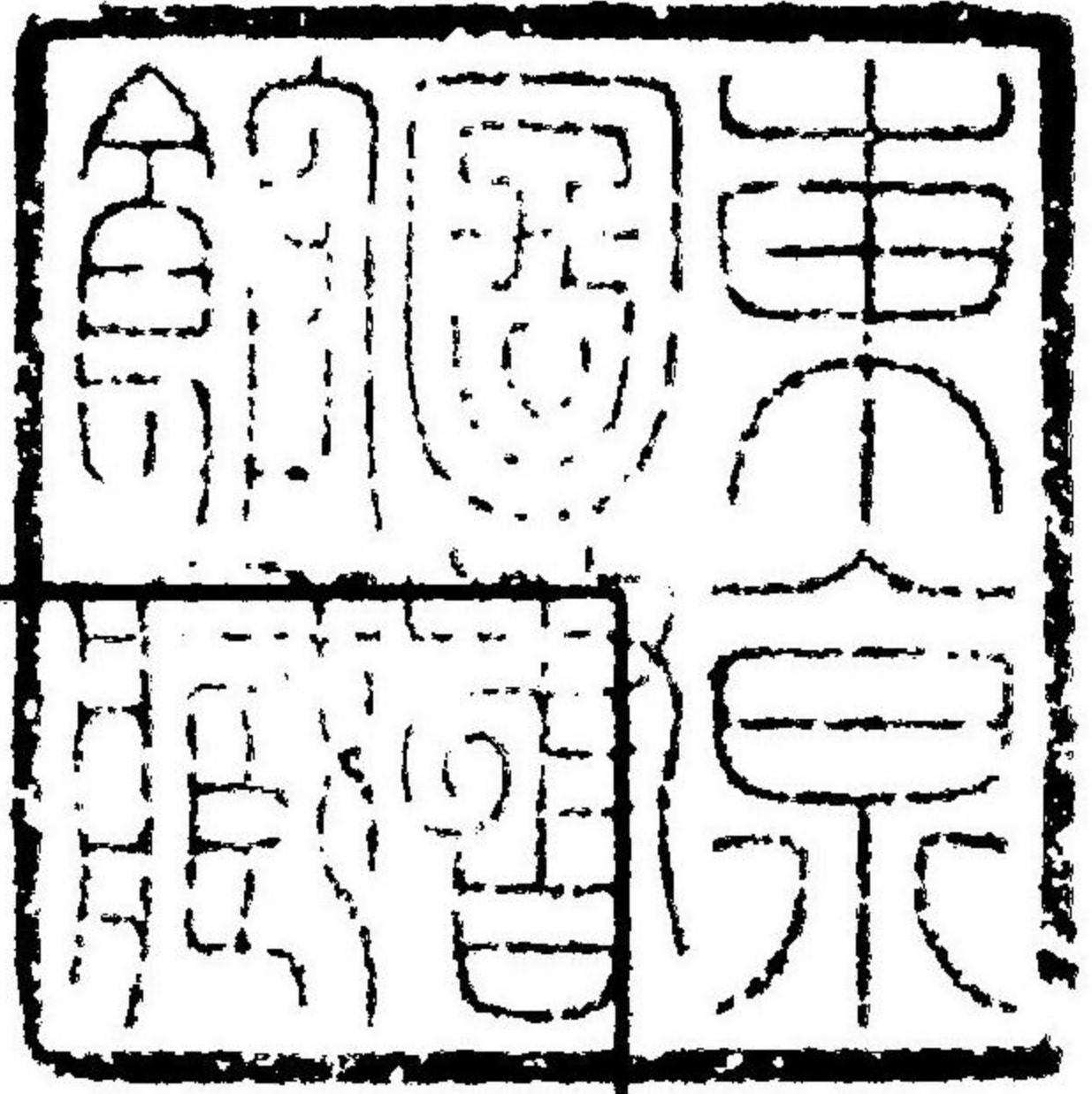
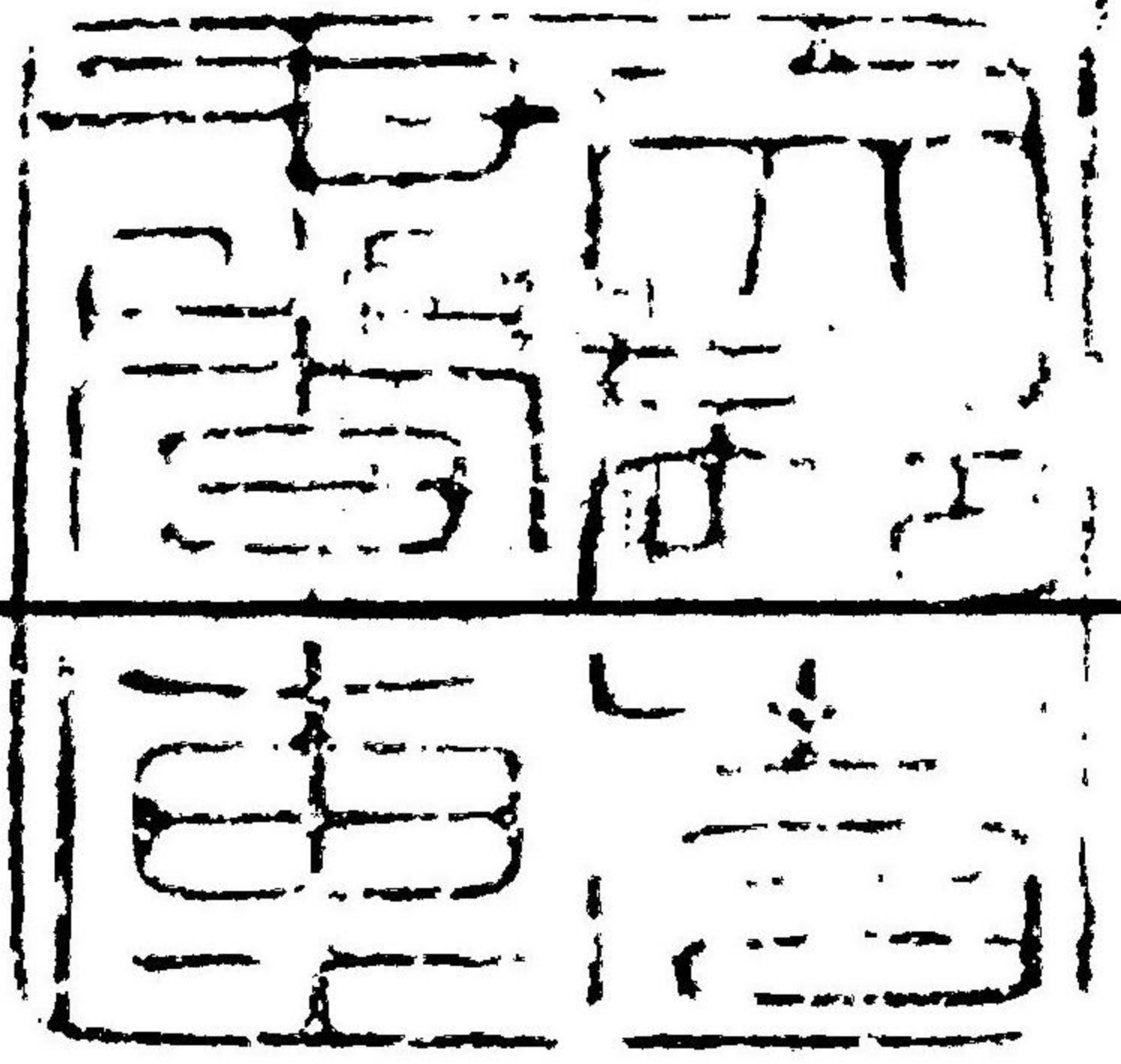
物 06

119

大日本租稅志

三

第四百七號



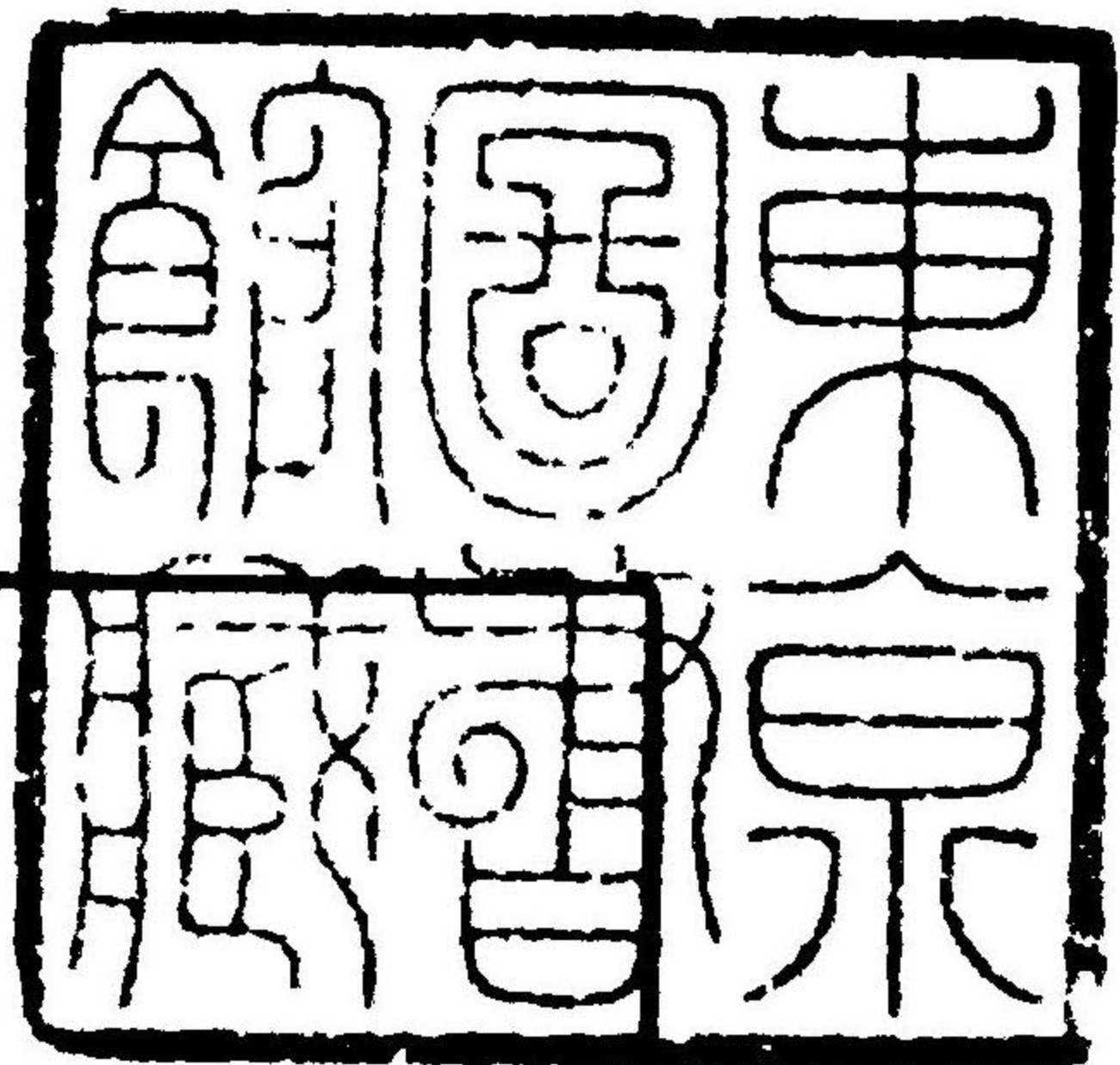
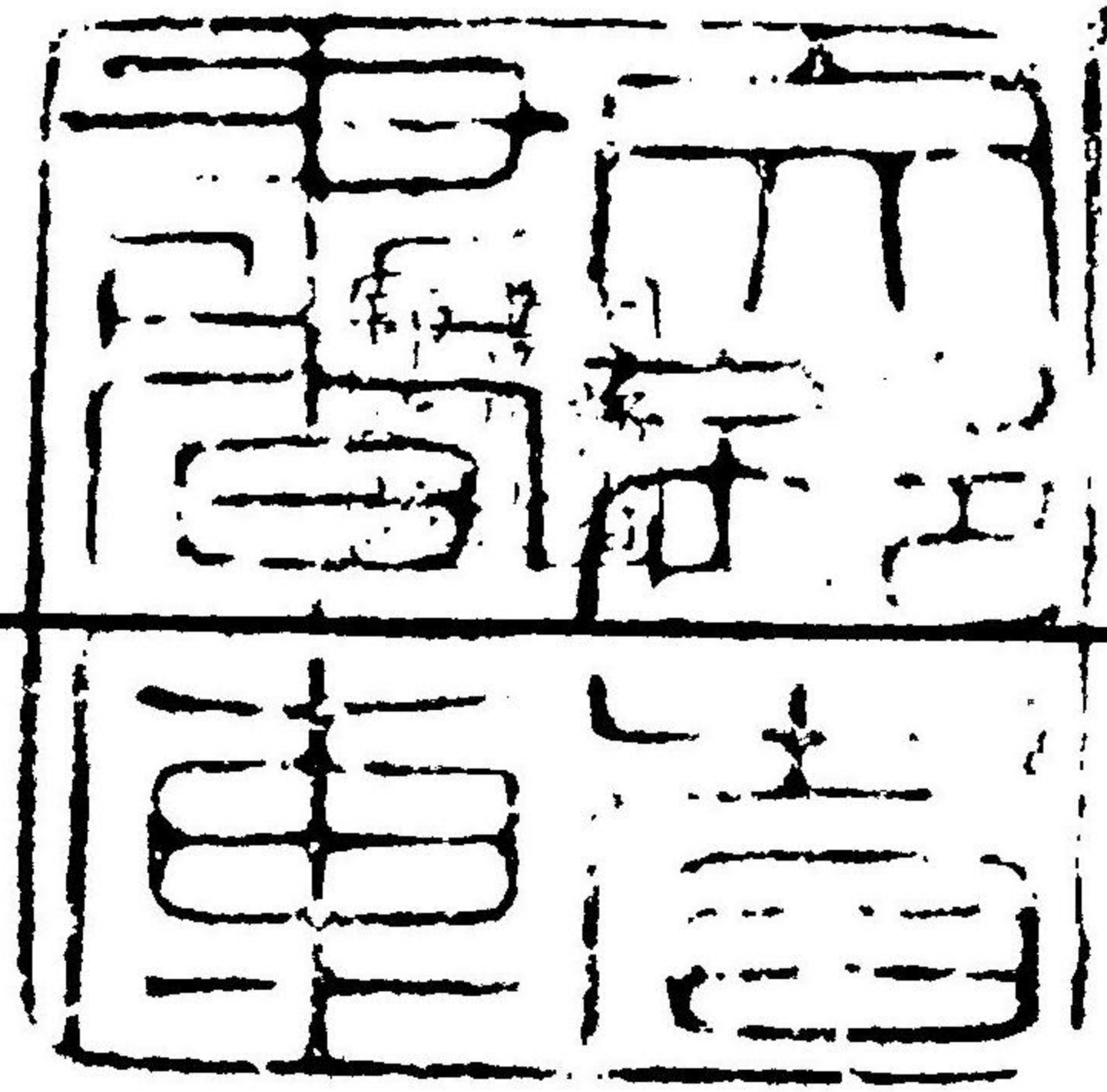
大日本租稅志卷之四

大藏權少書記官正七位野中準等修

位田

按位田ハ一品以下從五位以上ノ人ニ付與スル所ノ田ニシテ各差等アリ集解ニ云令ヲ按スルニ外位モ亦同キナリ但神龜五年三月ノ格ニ云外位ハ内位ノ半ヲ減シテ之ヲ給スト是ニ由テ之ヲ觀レハ外位半ヲ減スルコト神龜ノ時ニ始ルナリ

〔倉凡〕位田ハ一品ニ八十町二品ニ六十町三品ニ五十町四品ニ卅町正一位ニ八十町從一位ニ七十四町正二位ニ六十町從二位ニ五十四町正三位ニ卅町從三位ニ卅四町正四位ニ廿四町從四位ニ廿町正五位



大日本租稅志卷之四

大藏權少書記官正七位野中準等修

位田

〔按位田ハ一品以下從五位以上ノ人ニ付與スル所ノ田ニシテ各差等アリ集解ニ云令ヲ按スルニ外位ハモ亦同キナリ但神龜五年三月ノ格ニ云外位ハ内位ノ半ヲ減シテ之ヲ給スト是ニ由テ之ヲ觀レハ外位半ヲ減スルコト神龜ノ時ニ始ルナリ〕

〔令凡ソ位田ハ一品ニ八十町二品ニ六十町三品ニ五十町四品ニ卅町正一位ニ八十町從一位ニ七十四町正二位ニ六十町從二位ニ五十四町正三位ニ卅町從三位ニ卅四町正四位ニ廿四町從四位ニ廿町正五位

二十二町從五位ニ八町女ハ三分ノ一ヲ減セヨ出

〔按義解ニ據レハ一品ニ八十町ハ二十八萬八千步其稻四萬束米ニシテ二千石ニ稻三萬束米ニシテ千五百石ナリ以下准算スヘシ正一位ハ一品ト同シ下テ從五位ニ至レハ稻四千束米ニシテ二百石トス其所獲此ノ如シ

凡ソ職田位田ヲ給フノ人若シ官位ノ内ニ解免スル

コト有ラハ解免スル所ニ從テ追セヨ田令○事職田條中ニ具レリ

凡ソ應ニ位田ヲ給フヘクシテ未タ請ケス及ヒ未タ

足ラスシテ身亡スル者ハ子孫追テ請クヘカラス令田

〔聖武天皇神龜三年二月朔日制〕五位已上薨卒ノ後例

六年ヲ限リ其位田ヲ收ルコト勿レ續日本紀

〔五年三月廿八日〕太政官奏ス外五位ノ位祿位田傳物

〔内位〕遷叙令ニ云凡ソ内外五位以上ハ勳授内八位外七位以上ハ奏授外八位及ヒ内外初位ハ皆官ノ判授ト雖日本紀考證ニ據ルニ京官外官ノ別ヲ立ツルニ始ル然トモ後來ハ之ヲ以テ特ニ階級ノ等差ト爲セリ

ハ内位ノ祿料ノ半ヲ減シ之ヲ給ハン女ハ三分ノ一ヲ減ス如シ故无ク上ヘスシテ一年ヲ經レハ給フコトヲ停メン勅ス宜ク前件ニ依テ永ク恒式ト爲スヘシ類聚三代格

〔天平元年十一月七日〕太政官奏ス親王及ヒ五位已上

諸王臣等ノ位田功田賜田竝ニ寺家神家ノ地ハ須ラ

ク改易スヘカラス便チ本地ヲ給ハン其位田ハ如シ

情願有テ上ヲ以テ上ニ易ヘン者ハ本田ノ數ヲ計ヘ

テ任マニ之ヲ給フコトヲ聽ルシ中ヲ以テ上ニ換ヘ

ン者ハ理與フヘカラス縱ヒ聽許アルモ民ノ要須タ

ラハ先ツ貧家ニ給ハン其賜田ノ人先ニ賜ハリシ例

ニ入テ見ニ實地ナキ者ハ所司即チ處分ヲ與ヘン位

田モ亦同シ餘ハ令條ニ依ラント之ヲ許ス類聚國史

〔按〕本地ヲ給フトハ收授ノ時其地ヲ改易セズ舊ニ依テ之ヲ給フヲ謂フナリ

光仁天皇寶龜九年四月九日勅自今以後五位以上ノ位田ハ薨卒ノ後一年收ルコト莫レ續日本紀

〔按〕神龜三年薨卒收田ノ制ヲ立テ六年トス是ニ至リ改テ一年トス延喜式ニ此文ト同意ノモノアリ相距ルコト百數十年其法ノ因仍シタルコト知ルヘシ

〔桓武天皇延曆二年九月朔日勅但馬紀伊阿波ノ三國ハ公田數少ク班給スルニ足ラス而シテ王臣ノ家競

フテ位田ヲ受ケ民ノ要地ヲ妨ク今ヨリ以後永ク停止ニ從ヘ類聚國史

〔十年二月廿一日〕是ヨリ先キ五位已上ノ位田ハ身沒

〔冠蓋〕冠蓋種神家ト有フカコト

〔百濟王〕姓氏類ニ云百濟國姓王ノ後ナリ

スルノ後例一年ヲ給フ若シ子無キ者ハ當年之ヲ收ム是ニ至テ子有ルト子無キトヲ問フコト無ク同ク一年ヲ給フコトヲ聽ル續日本紀類聚國史

〔十二年正月六日勅〕去シ神龜五年ノ奏ヲ省ルニ五位已上ノ子孫世ヲ累マルノ冠蓋及ヒ明經秀才ノ儒々

ルニ堪ヘタル者ハ即チ内位ニ叙ス自餘ハ先ツ外位ニ叙シ勞ヲ積テ内ニ入ル其外位ノ位祿位田賻物ハ

内位ノ半ヲ給フ女ハ三分一ヲ減ス云々但位田位祿賻物ノ數蔭階資人ハ前例ヲ因修シ主者施行セヨ類聚三代格

〔十六年二月七日勅〕從五位上島野女王百濟王考法百濟王惠信和氣朝臣廣子橘朝臣常子紀朝臣内子紀朝

臣殿子藤原朝臣川子錦部連眞奴從五位下弓削宿禰

美濃人等ノ位田ハ宜ク男ニ准シテ之ヲ給フヘシ日本

後紀

〔平城天皇大同元年十二月勅〕比年ノ間諸國按定シテ

申ス所ノ位田帳ニ依テ新叙位ノ人等ニ班給ス而シ

テ命云フ給フ所ノ位田或ハ崩埋シテ川ト成リ或ハ

荒廢シテ位田ト爲スニ堪ヘスト夫レ位田ノ設ケハ

其主ヲ優スルカ爲メナリ所在ノ國司自今以後按田

ノ日細ニ按シ申サシメ更ニ然ルコトヲ得サレ類聚國史

〔式〕凡ソ外五位ノ位田ハ内位ノ半ヲ減ス民部式

凡ソ位田ハ各二分ト爲シ一分ハ畿内ニ給ヒ一分ハ

外國ニ給フ其一處ノ置ク所ハ十町ニ過ルヲ得ス但

授給ノ後偏ニ川成ト號スルモ必シモ改メ給フハカ

ラス若シ非常流損ノ國ハ淵潭ト成ルノ處ヲ明ニシ

實ニ依テ相換フルコトヲ許ス荒田ハ此限ニ在ラス

民部式

〔按〕畿内ノ地延袤限アリ而シテ位田盡ク畿内ニ

於テ之ヲ給セハ民ニ班ツ地十キニ至ラン故ニ

半ハ外ニ給ス若シ其給スル所ノ田流亡スルハ

實ヲ檢シテ代地ヲ給フ其自ラ怠テ荒廢スル者

ハ給ハサルナリ

凡ソ但馬紀伊阿波等ノ國ハ位田ヲ置クコトヲ得ス

民部式

〔按〕延暦二年九月ノ條ニ本文ノ意ヲ載セ
タリ爾後其法ノ因襲セルコト知ルヘシ

〔全町〕蓋シ一町ニ滿ルヲ謂フ

此文太政官符ニ係ル原書其文字無キヲ以テ之ヲ闕如ス

凡ソ位田ハ薨卒ノ後一年收ルコト勿レ式民部

凡ソ品田ヲ授クルハ親王内親王其數一ニ同シ式民部

凡ソ乘田ノ品位田ニ充ツ可キ者ハ全町ヲ以テ之ヲ給フ式民部

凡ソ諸國品位田ノ帳ハ稅帳使ニ附ケテ毎年之ヲ進ム式民部

凡ソ無主ノ品位田ハ穀倉院ニ移シテ其地子ヲ收メシム式民部

〔村上天皇天曆五年十二月廿七日〕穀倉院ノ解ヲ得ルニ曰ク謹テ式條ヲ案スルニ曰ク无主位田ハ穀倉院ニ移シテ其地子ヲ收メシムト此文ノ如キハ畿内外

國ヲ論セス院ニテ地子ヲ收ム可キ者ナリ而シテ只畿内ヲ收メ外國ヲ勘セス然ラハ則チ式行フ所ニ彼此相違フ加以ス位田ヲ授給スル各二分ト爲シ一分ハ畿内ニ給ヒ一分ハ外國ニ給フ爰ニ民部省ノ行フ所ノ件ノ國畿内ニ准スト號シ普ク諸大夫ニ給フ若シ其給ハサルノ間ハ无主位田ト爲ス其地子物ニ至テハ竝ニ帳ニ附シ言上スヘシ政事要略

〔堀河天皇嘉保元年五月二十日〕民部省位田宛文民部田所收テ從五位上藤原朝臣ニ位田拾町ヲ給フ大和國城下郡參條參里陸坪一町元祐漆坪一町同路東十伍條貳里參坪一町同捌坪一町同玖坪一町同參條井

里十二坪一町同 拾四坪一町同 拾陸坪一町同 同郡西
郷拾伍條貳里參坪一町同 捌坪一町朝野群載

職田

〔按〕職田ハ太政大臣ヨリ以下外官ニ至ルマテ職ノ輕重大小ニ隨テ授クル所ナリ而シテ其等職田令拾芥抄皆同シ博士助教等其ノ職田ハ宜キニ隨テ之ヲ給フ概テ本文ニ見エタリ田令集解ニ云職田ハ官仕ニ依テ給スル所更ニ進租ナシト元慶六年九月ノ條引ク所ノ式文ト異ナリ且主稅式不輸租田ノ列ニ加ヘス其文ヲ玩味スルニ亦輸租田ナリ

〔令〕凡ソ職分田ハ太政大臣ニ卅町左右大臣ニ卅町大

納言ニ廿町田令

凡ソ職田位田ヲ給フノ人若シ官位ノ内ニ解免スル

〔是〕追收スルナリ

〔是〕納ナリ

コト有ラハ解免スル所ニ從テ追セヨ其餘名ハ口分ノ例ニ依レ若シ賜田有ラハ亦追セヨ當家ノ内ニ官位及ヒ口分少クシテ應ニ受クヘキ者有ラハ竝ニ廻シ給フコトヲ聽ルセ乘レルコト有ラハ追收セヨ田令
凡ソ在外ノ諸司ノ職分田ハ太宰帥ニ十町大貳ニ六町小貳ニ四町大監小監大判事ニ二町大工小判事大典防人正主神博士ニ一町六段小典陰陽師醫師小工算師主船主廚防人佑ニ一町四段諸令史ニ一町史生ニ六段大國ノ守ニ二町六段上國ノ守大國ノ介ニ二町二段中國ノ守上國ノ介ニ二町下國ノ守大上國ノ掾ニ一町六段中國ノ掾大上國ノ目ニ一町二段中下

國ノ目ニ一町史生ハ前ノ如シ令田
 凡ソ郡司ノ職分田ハ大領ニ六町少領ニ四町主政主
 帳ニ各二町狹キ郷ハ要シモ此數ニ滿ツヘカラス令田
 凡ソ在外ノ諸司ノ職分田ハ交代ノ以前ニ種エタル
 者ハ前人ニ入レヨ若シ前人自ラ耕シ未タ種エサル
 ハ後人其功直ヲ酬ヘ闕官田ハ公力ヲ用ヒテ營種セ
 ヲ有ル所ノ當年ノ苗子ハ薪人ノ至ル日數ニ依テ給
 付セヨ令田

〔按〕交替式ニ云民部省ノ例新任外官五月一日以
 後任ニ至ル者ハ職分田前人ニ入ル其薪人ノ給
 與來年八月卅日ヲ限ル若シ四月卅日以前ノ者
 ハ田ハ後人ニ入レ功ハ前人ニ酬フ即チ換料ハ
 當年八月卅日ヲ限ルト以上交替ノ間屬スル
 所ノ差別斯ノ如シ録シテ以テ參考ニ備フ

〔中品〕田品中ニ
 位スルヲ謂フ
 主稅式ニ上田
 五百束中田四
 百束下田三百
 束云々各田品
 ニ依テ五分ノ
 一ヲ輸サレム
 ト是ナリ
 〔當色〕當ニ授ク
 ヘキノ田各職
 定リアルヲ謂
 フ

〔桓武〕天皇延曆九年八月八日勅今聞ク行フ所ノ職田
 彼此相濫レ或ハ左大臣ノ田ヲ以テ右大臣ニ給ヒ或
 ハ右大臣ノ田ヲ以テ大納言ニ給フ分職ノ理此ノ如
 クナルヘカラス宜ク中品以上ヲ選テ色別ニ點定ス
 ヘシ然トモ大納言以上其職惟レ重シ此ニ因テ殊ニ
 畿内ニ二分外國ニ一分ヲ給ヘ應ニ職田ヲ授クヘキ
 者有ラハ各當色ヲ以テ之ヲ給ヘ彼此意ニ任セテ請
 ヒ替ルコトヲ得サレ自餘ノ職田モ亦此ニ准セヨ自
 今以後永ク恒例ト爲ン

合職田一百卅町

内九十五町
 外卅五町

元六十町ヲ加フ
 今三十五町ヲ加フ

太政大臣職田卅町

内廿七町
 外十三町

大和國廿町 坂下郡十町

山背國七町 相樂郡二町

近江國十町 栗太郡三町

播磨國三町 揖保郡

左大臣職田卅町 外十町

河內國五町 高安郡二町

攝津國十町 豐島郡三町

山背國五町 相樂郡二町

播磨國十町 明石郡三町

右大臣職田卅町 外十町

攝津國十町 島上郡八町

綴喜郡二町

河內郡二町

島下郡二町

久世郡二町

寶古郡六町

校本欄外ノ考ニ云此件應ニ脱文アルヘシ

山背國十町 久世郡五町

播磨國十町 揖保郡

大納言職田廿町 外十四町

大和國二町 平群郡

河內國八町 若江郡五町

山背國四町 乙訓郡二町

近江國六町 野洲郡二町

大納言職田廿町 外十四町

河內國十町 高安郡二町

若江郡三町

山背國四町 愛宕郡二町

河內郡二町

蒲生郡二町

河內郡二町

乃田為稱稱法 續法 廿 乃田為稱稱法

播磨國六町 揖保郡〇類

〔十年二月十八日勅〕今聞ク行フ所ノ職田彼此相賀ヘテ定レル處アルコトナシ或ハ博士ノ田ヲ以テ助教ニ給ヒ或ハ助教ノ田ヲ以テ直講ニ給フ名ヲ正スノ理此ノ如クナルヘカラス然トモ五經ハ是レ九流ノ源ナリ本ヲ崇フノ道當ニ其品ヲ殊ニスヘシ宜ク明經博士ニ五町助教ニ四町直講ニ四町ヲ給フヘシ又明法ハ是レ國ヲ理ムルノ急務ナリ而シテ業ニ進ム者寡シ宜ク四町ヲ給フヘシ針博士ハ承前ノ例給フ所四町今一町ヲ減シテ三町ニ定メ自餘ノ諸博士ハ前ノ例ニ依テ之ヲ給ヘ仍テ中品以上ヲ擇ヒ取テ色

〔九流〕漢書藝文志ニ云孔子授後諸弟子各一家ノ旨ヲ編成ス凡ソ九ト爲ス一曰儒家流二曰道家流三曰陰陽家流四曰法家流五日名家流六曰墨家流七曰縱橫家流八曰雜家流九曰農家流

別ニ定メ給ヒ相賀ヘシムルコト勿レ自今以後永ク恒例ト爲セヨ

合職田七十三町 内五十二町 外廿一町

博士職田五町

河内國二町 志紀郡

山背國一町 綾喜郡

近江國二町 野洲郡一町 甲賀郡一町

助教職田四町

攝津國二町 島上郡

山背國一町 紀伊郡

近江國一町 栗太郡

大日本地理志 卷之四 郡縣

近江國一町 野洲郡

明法博士職田四町

大和國一町 平群郡

山背國二町 相樂郡

近江國一町 神崎郡

音博士職田三町

河內國二町 若江郡

近江國一町 野洲郡

音博士職田三町

河內國二町 河內郡

近江國一町 坂田郡

書博士職田三町

山背國二町 久世郡

近江國一町 神崎郡

書博士職田三町

攝津國二町 島上郡一町 豐島郡一町 野洲郡

近江國一町

算博士職田三町

河內國一町 廣長郡

山背國一町 久世郡

近江國一町 坂田郡

算博士職田三町

大日本地理志 卷之四 郡縣 十一 大藏省

州内郡縣
州内郡縣
州内郡縣

攝津國一町 河邊郡

山背國一町 綴喜郡

近江國一町 神崎郡

天文博士職田四町

攝津國一町 豐島郡

山背國二町 綴喜郡

近江國一町 野洲郡

陰陽博士職田四町

河内國一町 若江郡

山背國二町 相樂郡

近江國一町 野洲郡

曆博士職田三町

山背國二町 久世郡

近江國一町 野洲郡

醫博士職田四町

攝津國一町 豐島郡

山背國二町 相樂郡

近江國一町 高島郡

針博士職田三町

山背國二町 紀伊郡

近江國一町 高島郡 ○類
聚三代格

〔事力〕官ヨリ在
中ノ人ニ附
千六年二月十六日畿内國司ノ事力並ニ職田ヲ給フ

ノ一ノ目見
ノ一ノ目見
ノ一ノ目見

録給事セシムル者ナリ

コトヲ停ム日本後紀
〔後前條ニ云大納言以上ノ職田二分ハ畿内ニ給ヒ一分ハ外國ニ給フト凡ソ畿内ハ官人ノ漏敷ナリ其職田等必ス多ク民ニ給スルノ田欠乏スルコト知ルヘシ今國司ノ職田ヲ停ムル蓋シ是カ爲ナラン

〔二十日〕類聚三代格五日ニ作ル

〔十七年四月二十日〕公卿奏ス謹テ令條ヲ案スルニ左
右京職條毎ニ坊令一人ヲ置キ所部ヲ督察セシム惟レ人はニ憑ル而シテ任ハ要籍ニ居リ秩ニ微俸無シ除補スルニ至テ競フテ避遁ヲ事トス伏シテ望ムラクハ少初位下ノ官ニ准シ祿竝ニ職田二町ヲ給ヒ其身ヲ優恤シ職掌ヲ勤メシメント之ヲ許ス類聚國史類聚三代格

〔料田〕陸田ヲ謂フ

〔平城〕天皇大同三年三月廿一日勅直講ノ員ヲ割テ紀傳ノ博士ヲ置キ其官位ハ直講ニ同ク料田ハ例ニ依レ類聚三代格

〔軍役〕兵ハ軍吏ナリ制度城ニ據ルニ中朝ノ兵制五人ヲ伍トシ十人ヲ火トシ五十人ヲ隊トス隊ニ正アリ百人ヲ旅トス旅ニ帥アリ二百人ヲ校トス校ニ尉アリ之ヲ總ルニ

〔四年五月十一日太政官符〕東山道ノ觀察使正四位下兼行陸奥出羽ノ按察使藤原朝臣緒繼ノ解ヲ得ルニ日ク陸奥國ノ四圍ノ軍毅十二人常ニ城中ニ直シテ私業ヲ顧ミス既ニ機速ニ備フルモ曾テ微祿ナシ其勤勞ニ准スレハ理須ラク優濟スヘシ今國內ヲ見ルニ乘田數多シテ佃食スル者少シ伏シテ請フ郡司ニ准シテ特ニ職田ヲ給ハン勅ス請ニ依レ類聚三代格
〔嵯峨〕天皇弘仁五年正月十五日太政官符征夷將軍參

軍門ヲ以テス
團ニ殺アソ五
百人以下ノ團
ハ殺一人ナリ
六百人以上ハ
大小殺各一人
ナリ千人ニ滿
ル時ハ大殺一
人小殺二人之
ヲ蒙ル
〔征夷將軍〕養老
四年九月播磨
按察使正四位
下多治比真人
縣守ヲ以テ持
節征夷將軍ト
爲スニ始ル傳
ヲ東夷征伐ノ
事ヲ蒙ル
〔兼國〕國官ヲ蒙
ルナリ

議從三位左衛門督兼陸奥出羽ノ按察使勳四等文室
朝臣綿麻呂ノ解ヲ得ルニ曰ク出羽ノ國司ノ解ニ曰
ク大小殺等常ニ軍團ニ直シテ私業ヲ顧ミス其勤勞
ヲ量ルニ實ニ須ラク優恤スヘシ望請フ校出セル公
田ヲ以テ陸奥國ノ軍殺ニ准シテ大殺一人ニ職田六
町小殺二人ニ職田各四町ヲ給ハン使覆勘ヲ加ルニ
申ストコロ實アリ勅ス宜ク件ニ依テ給フヘシ
類聚三代
格
〔仁明天皇〕永和元年八月二十日太政官符遣唐使兼國
ノ人等使ヲ奉シテ唐ニ入ル專須ラク優給スヘシ宜
ク去シ延曆廿一年十一月廿四日ノ符ニ准シテ職田

ヲ給フヘシ
類聚三代
格
〔按〕國官ハ固ヨリ職田アリ今兼任シテ入唐スル
カ爲メ其田ヲ收ムルハ宜ク優恤スヘキヲ以テ
書ニ仍テ職田ヲ給フナリ延曆廿一年
ノ符諸書見ル所ナシ蓋シ闕文ナリ

〔六年三月十五日〕内外權任ノ郡司ニ職田ヲ給フコト
ヲ停ム
續日本
後紀

〔嘉祥元年二月廿二日〕陸奥國磐瀨郡權大領外從七位
上大部宗成等ニ特ニ職田ヲ給フ民ヲ視ルコト方ア
リ公勤懈ルニ匪サルヲ以テナリ
續日本
後紀

〔清和天皇貞觀元年六月廿五日〕文章博士ノ職田元四
町ヲ給フ今二町ヲ加フ
實三代
錄

〔按〕延曆十年ニハ四町トシ此ニハ更ニ二町ヲ増
ス又民政部式ニ云凡ソ文章博士ニ職田五町算博

土ニ四町ト蓋シ時ニ隨テ
増減有ルコト見ルヘシ

〔七年三月廿二日〕筑前國ノ水田三十町ヲ以テ對馬島

上縣下縣ノ兩郡司ニ充テ職田ヲ統領セシム三代實錄

〔按〕對馬島ノ水田以テ兩郡司ノ
職田ニ充ルニ足ラサレハナリ

〔十一年二月二十日〕勅シテ鎮守府ノ府掌二人ニ職田

各二町ヲ賜フ三代實錄類聚

〔按〕鎮守府本ト府掌ナシ承和十年九月十九日始
テ一員ヲ置ク而シテ此二人ト言フトキハ蓋シ
後之ヲ益スナリ而シテ是ニ
至テ始テ職田ヲ賜フナリ

〔七月廿七日〕美作國苦東苦西ノ二郡司ノ職田十町ヲ

加ヘ置ク三代實錄

〔十三年十二月廿七日〕太政官符主稅頭從五位上兼行

〔鎮守府〕聖武天皇陸奥國及ヒ大宰府ニ之ヲ置キ東西ノ要鎮ト爲ス

〔隨身兵仗ヲ帶テ隨從スル者ヲ謂フ〕

算博士家原宿禰氏主等ノ解狀ニ曰ク謹テ令條ヲ案
スルニ音書算三道ノ博士竝ニ從七位上ノ官ヲ置ク
去シ神龜五年初テ律學ヲ置キ正七位下ノ官ト爲ス
其職田ハ明法ニ四町音書算ニ各三町茲ニ因テ去シ
仁壽元年五月十七日明法ニ准シ算博士ノ職田ヲ加
ヘテ總テ四町ト爲ス位階ニ至テハ未タ加進アラヌ
望請フ明法博士ニ准シテ位階ヲ加増シ明法ノ次ニ
列セン勅ス請ニ依レ類聚三代格

〔陽成天皇元慶六年二月九日〕太政大臣ノ職封職田資
人雜俸ヲ減スルノ狀所司ニ頒下ス但隨身ハ詔旨ノ

如シ三代實錄

〔按太政大臣ハ藤原基經ナリ是ヨリ先キ上表シテ職封職田資人ノ雜俸等ヲ減セント請フ勅シテ其請フ所ニ從ヒ舊儀賜フ所ノ隨身内舍人二人左右近衛各四人ヲ減定ス所謂隨身詔旨ノ如シトハ之ヲ謂フナリ〕

〔九月二日〕是ヨリ先キ民部省言ス主稅寮ノ解ニ曰ク式ニ云ク職田ハ輪租田ト爲ス其未授ノ間ハ輪地子田ト爲スト今畿内ヲ檢スルニ無主職田穀倉院ニ收ム格式ニ載セスト雖モ而モ事是レ例ト爲ル外國ニ至テハ存亡ヲ論セス永ク租田ト爲ス只式ニ違フノミニ非ス亦公損アリ然リ而シテ既ニ證驗無ク勘徵ニ由無シ請フ大納言已下及ヒ諸博士等其關ルコトアル毎ニ式部省ヲシテ移送シ以テ勘會ニ備ヘシメ

ン但其地子ハ正稅ニ混合シ將ニ公益ヲ存セントスト太政官處分ス請ニヨレ三代實錄 類聚國史

〔光孝天皇仁和二年十一月十一日〕勅シテ長門國ノ軍毅一人主帳一人ニ始テ職田ヲ給フ三代實錄

〔式〕凡ソ畿外諸國ノ無主職田ハ其關アル毎ニ式部省ヨリ主稅寮ニ移送シテ其地子ヲ納メ正稅ニ混合ス民部式

凡ソ文章博士ニ職田五町算博士ニ四町民部式

凡ソ志摩ノ國司ハ事力ヲ充ラス其職田五町ハ伊勢

國ノ田ヲ以テ之ヲ給フ民部式

凡ソ甲斐國ノ牧監ニハ職田六町ヲ給フ上野國ノ牧

監ノ職田モ亦同シ民部式

凡ソ權任ノ郡司ニハ職田ヲ給ハス但太宰府ノ書生

ノ郡司ヲ帶フル者ハ此例ニアテス民部式

凡ソ陸奥ノ鎮守太宰等ノ府ノ府掌各二人人コトニ

職田二町ヲ給フ民部式

凡ソ佐渡國雜太ノ團ハ軍殺ニ職田二町主帳ニ一町

ヲ給フ民部式

〔職本〕佐渡國ノ郡名ナリ

功田

〔按〕功田ハ有功ノ者ニ賜フ所ノ田ナリ功ニ大上
中下ノ四等ヲ立テ以テ死後ノ處分ニ至ルコト
始テ田令ニ見エタリ其制實ニ大實ニ始ルヤ否
ヤヲ詳ニセス且功田間マ賜田ト疑似セルモノ

類聚國史朱鳥ノ年號アリ

〔三族〕父母妻ノ族ヲ謂フ

アリ得テ而シテ確徵スヘカラス今本文ヲ掲
録スル始ク其文意ニ據テ而シテ之ヲ部分ス

〔用〕明天皇二年七月蘇我馬子大臣物部守屋大連ヲ伐

ツ迹見首赤檮射テ大連ヲ墮ス亂ヲ平クルノ後出一

万頃ヲ以テ赤檮ニ賜フ日本書紀

〔持〕統天皇四年十月廿二日詔大伴部博麻云々朕厥朝

ヲ尊ヒ國ヲ愛シ己ヲ賣テ忠ヲ顯スコトヲ嘉ニス故

ニ云々水田四町ヲ賜フ曾孫ニ及ホシ三族ノ課役ヲ

免シ以テ其功ヲ顯セ日本書紀

〔按〕大伴部博麻ハ齊明帝七年百濟ヲ救フノ役唐

軍ニ虜セラレ後土師連富村等國ノ爲メニ歸朝

セシトスルニ衣糧無シ故ニ其身ヲ賣テ以テ之

ヲ歸シ獨リ留ルコト三十年其身生還スルコト

ヲ得タリ是ヲ以テ物及ヒ田ヲ賜テ子孫ニ及ハシムルナリ

〔入心〕謀反謀大 逆謀叛惡逆不 道大不敬不孝 不存

〔令〕凡ソ功田大功ハ世々絶エス上功ハ三世ニ傳ヘ中 功ハ二世ニ傳ヘ下功ハ子ニ傳ヘヨ大功ハ謀叛以上 ニ非ス以外ハ八虐ノ除名ニ非サレハ竝ニ收メス〔按〕義解ニ云大功ハ惡逆以下ヲ犯スモハ收メ ス上功以下ハ八虐ノ外ニ餘ノ除名ヲ犯スモハ 收メ限ニ在ラサルナリ假ヘハ功田十町アリ 父没シテ以後兄弟甲乙各五町ヲ得ルニ甲除名 ヲ犯サハ甲ノ五町ヲ收メテ公ニ還スヘキナリ 凡ソ應ニ功田ヲ給フヘクシテ若シ父祖未タ請ケス 及ヒ未タ足ラスシテ身亡スレハ子孫ニ給ヘ〔令〕 元明天皇和銅二年九月廿六日伊勢守正五位下大宅 朝臣金弓尾張守從四位下佐伯宿禰大麻呂近江守從 四位下多治比真人水守美濃守從五位上笠朝臣麻呂

〔吉蘇路〕文武紀 二云始テ美濃 國枝孫ノ山道 ヲ開クト和訓 乘ニ云枝孫ハ モト木岐ノ義 熊襲ニ對シテ 稱フナルヘシ ト古來枝孫枝 姐又木曾トモ 書ケリ皆同シ

ニ當國ノ田各一十町穀二百斛衣一襲ヲ賜フ其政績 ヲ美テナリ續日本紀 類聚國史 〔按〕往昔ハ時々使ヲ遣シテ四方ノ風ヲ巡視シ國 守ノ能否ヲ檢察ス以テ勸懲黜陟ノ典ヲ行フ是 ナリ 〔七年閏二月朔日〕美濃守從四位下笠朝臣麻呂ニ封七 十戸田六町ヲ賜ヒ竝ニ從六位上伊福部君荒當ニ田 二町ヲ賜フ吉蘇路ヲ通スルヲ以テナリ續日本紀 〔聖武天皇神龜二年閏正月廿二日〕從七位下後部王越 等一十人竝ニ勳六等ヲ授ケ田二町ヲ賜フ續日本紀 〔孝謙天皇天平寶字元年十二月九日〕太政官奏シテ曰 ク功ヲ旌ハシ命ヲ錫フハ聖典ノ重スル所ナリ善ヲ

〔天德〕天智天皇
三年二月冠位
二十六階ヲ定
ム大綫小綫大
綫小綫大綫小
綫大綫上大綫
中大綫下小綫
上小綫中小綫
下大山上大山
中大山下小山
上小山中小山
下大上上大上
中大下下小上
上小中中小上
下大綫小綫是
ナリ

褒メ封ヲ行フハ明王ノ務ル所ナリ乙巳ヨリ以來人々功ヲ立テ各封賞ヲ得ル但大上中下令條ニ載スト雖モ功田ノ記文或ハ其品ヲ落ス今故ニ昔ノ令ヲ比校シテ其品ヲ議定セシム大織藤原内大臣乙巳ノ年ノ功田一百町大功ナリ世々絶エス贈小紫村國連小依壬申ノ年ノ功田十一町贈正四位上文忌寸禰麻呂贈直大壹丸部臣君手竝ニ同年ノ功田各八町贈直大壹文忌寸智徳同年ノ功田四町贈小錦上置始連菟同年ノ功田五町五人竝ニ中功ナリ二世ニ傳フヘシ正四位下下毛野朝臣古麻呂贈正五位上調忌寸老人從五位上伊吉連博徳從五位下伊余部連馬養竝ニ大寶

〔淡海朝〕淡海ハ
即チ近江ナリ
天智帝ノ朝ヲ
謂フ
〔餘陰〕集出ニ云
陰音卷本ト聞
ニ作ル治世ノ
處ナリ
〔大雲〕雲ハ紫ノ
賦カ

二年律令ヲ修ム功田各十町四人竝ニ下功ナリ其子ニ傳フヘシ以上先朝定贈大錦上佐伯連古麻呂乙巳ノ年ノ功田三十町六段他ニ驛卒セラレカヲ効シ姦ヲ誅ス功推ス所アリ大ト稱スル能ハス令ニ依ルニ上功ナリ三世ニ傳フヘシ從五位上尾治宿禰大隅壬申ノ年ノ功田三十町淡海朝廷諒陰ノ際義ヲ以テ警蹕ヲ興シ潛ニ關東ニ出ツ時ニ大隅參リ迎ヘテ導キ奉リ私第ヲ掃清シ遂ニ行宮ヲ作り軍資ヲ供助ス其功實ニ重シ大ニ准スレハ及ハス中ニ比スレハ餘リアリ令ニ依ルニ上功ナリ三世ニ傳フヘシ贈大雲星川臣麻呂壬申ノ年ノ功田四町贈大錦下坂上直熊毛

同年ノ功田六町贈正四位下黃文連大伴同年ノ功田八町贈小錦下文直成覺同年ノ功田四町四人竝ニ戎場ヲ歴涉シ忠ヲ輸シ事ニ供ス功ヲ立ルコト異ナリト雖モ勞効是レ同シ比較スルニ一同ナリ村國連小依等令ニ依ルニ中功ナリ二世ニ傳フヘシ大錦下笠臣志太留吉野大兄ノ密ヲ告ケシ功田二十町微言ヲ告ル所尋テ露驗スルニ非ス大事ナリト云ト雖モ理輕重スヘシ令ニ依ルニ中功ナリ二世ニ傳フヘシ從四位下上道朝臣斐太都天平寶字元年ノ功田二十町人ノ反セント欲スルヲ知リ告ケテ芟リ除カシム論實ニ重シト雖モ本ト專制ニ非ス令ニ依ルニ上功ナ

リ三世ニ傳フヘシ小錦下坂合部宿禰石敷功田六町使ヲ唐國ニ奉シ賊洲ニ漂著シ横斃矜ムヘシ功ト稱スルコト未タ愜ハス令ニ依ルニ下功ナリ其子ニ傳フヘシ正五位上大和宿禰長岡從五位下陽胡史眞身竝ニ養老二年律令ヲ修ム功田各四町外從五位下矢集宿禰虫麻呂外從五位下鹽屋連吉麻呂竝ニ同年ノ功田各五町正六位上百濟人成同年ノ功田四町五人竝ニ刀筆ヲ執持シテ科條ヲ刪リ定ム成功多シト雖モ事匡難ニ匪ス比較スルニ一ニ下毛野朝臣古麻呂等ニ同シ令ニ依ルニ下功ナリ其子ニ傳ヘシム以上定ムルトコロ

○類日本紀

大日本種姓志 卷之四 十九 大藏

〔紫微内相〕晉書
 天文志ニ云紫
 微星十五星天
 帝ノ座ナリト
 蓋シ帝王ノ居
 ヲ稱ス内相ハ
 職原鈔標注ニ
 後世ノ内大臣
 ノ如レトス大
 保ハ即チ右大
 臣ノ稱トスレ
 ハ其内大臣ヨ
 リ昇遷スルコ
 ト知ルヘシ
 〔實〕恐クハ實ノ
 誤

〔淳仁天皇天平寶字二年八月廿五日〕紫微内相藤原朝臣仲麻呂ヲ以テ大保ニ任シ勅レテ曰ク善ヲ褒メ惡ヲ懲スハ聖主ノ格言ナリ續テ寶シ勞ニ酬フルハ明主ノ彝則ナリ云々更ニ功封三千戸功田一百町ヲ給ヒ永ク傳世ノ賜モノト爲シ以テ不常ノ勳ヲ表セヨ

〔按〕藤原朝臣仲麻呂ハ大織冠ノ後裔ニシテ世々皇室ヲ輔翼スルノ偉功アリ故ニ此恩典アリ

〔稱徳天皇天平神護元年三月十日〕從三位和氣王ニ功田五十町從四位上大津宿禰大浦ニ十五町ヲ賜フ

續日 本紀

〔二年二月廿二日〕從三位山村王ニ功田五十町從四位

上日下部宿禰子麻呂從四位下坂上大忌寸苅田麻呂佐伯宿禰伊多知正五位上淡海真人三船從五位上佐伯宿禰三野五人ニ各二十町從五位下紀朝臣船守外從五位下民忌寸總麻呂二人ニ各八町ヲ賜ヒ竝ニ其子ニ傳ヘシム

續日 本紀

〔桓武天皇延暦十六年二月十五日勅〕故從三位勳二等坂上大宿禰苅田麻呂正四位上勳二等道島宿禰島足等寶字ノ歲卒カニ不虞ニ遇ヒ奮テ身ヲ顧ミス共ニ其効ヲ著ハス是ヲ以テ勳ヲ叙スルノ日二等ヲ授ケ功田廿町ヲ加ヘ賜ヒ竝ニ其子ニ傳ヘシム而シテ後特ニ島足ヲ以テ之ヲ大功ニ准シ賜フ所ノ田世々絶

〔時庸〕書類典ニ
云帝曰ク時カ
時ニ若フテ否
フテ至庸セシ

大日本書紀卷之四

三十一

州縣

エス功既ニ同等ナリ賞何ソ科ヲ殊ニセン時庸ノ典
 恐クハ未タ允ナラサル有ラン宜ク其島足ノ功田ハ
 前年ノ勅ニ依テ子ニ傳フルノ限ニ同フスヘシ日本後紀
 〔十七年〕和氣朝臣清麻呂上表シテ骸骨ヲ請フ優詔シ
 テ許サス仍テ功田廿町ヲ賜ヒ以テ其子孫ニ傳ヘシ
日本後紀

〔朱雀天皇天慶三年三月九日〕秀郷ヲ從四位下ニ叙シ
 兼テ下野武藏兩國ノ守ニ任シ公田ヲ給ヒ永ク子孫
 ニ傳ヘシ帝王編年紀古事談

〔按〕天慶三年正月十一日太政官符ニ云東海東山
 道諸國司應ニ殊功アル輩ヲ拔テ不次ノ賞ヲ加
 フヘシ若シ魁帥ヲ殺ス者ハ募ルニ朱紫ノ品ヲ
 以テシ賜フニ田地ノ賞ヲ以テシ永ク子孫及

ホシ之ヲ不朽ニ傳ヘント是レ平將門ヲ誅スル
 時ニ下ヌ符ナリ秀郷將門ヲ誅スルニ於テ殊功
 アリ因テ此褒賜アルナリ

賜田 賜地附

〔按〕賜田給田稱謂異ニシテ其實同キモノアリ異
 ナル者アリ或ハ彼ニ賜ト書シ此ニ給ト書ス田
 令ニ云凡ソ別勅人ニ田ヲ賜フ者ヲ賜田ト名ツ
 ヲ集解ニ云位職田及ヒ口分田雜色田等別勅人
 ヲ指シテ給フノミト其特ニ寵臣貴戚ニ止マラ
 ナルコト知ルヘシ今集解ニ云フ所ノモノハ各
 中ニ收ム

〔持統天皇十年四月廿七日〕伊豫國風速郡物部藥肥後
 國皮石郡壬生諸石人コトニ水田四町ヲ賜ヒ以テ久
 ク唐地ニ苦ムヲ慰ム日本書紀類聚國史

大日本書紀卷之四 三十一 州縣

〔文武天皇大寶元年三月廿九日〕右大臣從二位阿倍朝臣御主人ニ備前備中但馬安藝國ノ田二十町ヲ賜フ
續日本紀 類聚國史

〔令〕凡ソ別勅人ニ田ヲ賜フ者ヲ賜田ト名ク田令

〔慶雲元年十一月十四日〕正四位下粟田朝臣真人ニ大倭國ノ田二十町ヲ賜フ使ヲ絶域ニ奉スルヲ以テナ

リ 續日本紀

〔按〕凡ソ使ヲ外國ニ奉スル者必シモ田ヲ賜ハス粟田朝臣唐國ニ使シ能ク我國光ヲ顯ハスヲ以テ特ニ之ヲ褒賞スルニ田ヲ以テナスルナリ

〔光仁天皇寶龜十一年四月七日勅〕備前國邑久郡ノ荒廢田一百餘町ヲ右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂ニ

賜フ續日本紀

〔桓武天皇延曆十五年九月八日〕山城國紀伊郡ノ陸田二町ヲ典侍從四位上和氣朝臣廣虫ニ賜フ日本後紀

〔三十日〕山城國葛野郡ノ公田二町ヲ從三位和氣朝臣清麻呂ニ賜フ日本後紀

〔十一月二日〕河內國志紀郡ノ荒田一町ヲ正七位下秋篠朝臣清野ニ賜フ日本後紀

〔十二月六日〕大和國十市郡ノ荒田一町ヲ左衛士督從四位下三島真人名繼ニ賜フ日本後紀

〔十六年正月廿四日〕能登國羽咋能登二郡ノ沒官田竝ニ野七十七町ヲ尙侍從三位百濟王明信ニ賜フ日本後紀

〔文武天皇大寶元年三月廿九日〕右大臣從二位阿倍朝臣御主人ニ備前備中但馬安藝國ノ田二十町ヲ賜フ
續日本紀 類聚國史

〔令〕凡ソ別勅人ニ田ヲ賜フ者ヲ賜田ト名ク田令

〔慶雲元年十一月十四日〕正四位下粟田朝臣真人ニ大倭國ノ田二十町ヲ賜フ使ヲ絶域ニ奉スルヲ以テナ

續日本紀

〔按〕凡ソ使ヲ外國ニ奉スル者必シモ田ヲ賜ハステ田朝臣唐國ニ使シ能ク我國光ヲ顯ハスヲ以テ特ニ之ヲ褒賞スルニ田ヲ以テスルナリ

〔光仁天皇寶龜十一年四月七日勅〕備前國邑久郡ノ荒廢田一百餘町ヲ右大臣正二位大中臣朝臣清麻呂ニ

賜フ續日本紀

〔桓武天皇延曆十五年九月八日〕山城國紀伊郡ノ陸田

二町ヲ典侍從四位上和氣朝臣廣虫ニ賜フ日本後紀

〔三十日〕山城國葛野郡ノ公田二町ヲ從三位和氣朝臣

清麻呂ニ賜フ日本後紀

〔十一月二日〕河內國志紀郡ノ荒田一町ヲ正七位下秋

篠朝臣清野ニ賜フ日本後紀

〔十二月六日〕大和國十市郡ノ荒田一町ヲ左衛士督從

四位下三島真人名繼ニ賜フ日本後紀

〔十六年正月廿四日〕能登國羽咋能登二郡ノ沒官田竝

ニ野七十七町ヲ尙侍從三位百濟王明信ニ賜フ日本後紀

大日本國志 卷之四 大和國

〔廿三年九月三日〕近江國蒲生郡ノ荒田五十三町ヲ式部卿三品伊豫親王ニ賜フ後紀日本

〔廿四年十一月十五日〕相模國大住郡ノ田二町ヲ從四位下百濟王教法ニ賜フ後紀日本

〔十二月廿三日〕山城國乙訓郡ノ白田一町ヲ大判事從五位下讚岐公千繼ニ賜フ後紀日本

〔嵯峨天皇弘仁五年七月六日〕尾張國丹羽郡ノ田二十四町ヲ夫人從三位橘朝臣諱ニ賜フ後紀日本

〔仁明天皇承和二年四月廿九日〕攝津國島上郡ノ荒廢田三町ヲ左大臣正二位藤原朝臣緒嗣ニ賜フ後紀日本

〔三年三月十七日〕大和國山邊郡ノ荒廢田十町ヲ宗康

〔白田〕陸田ナリ
習書ニ見エタリ

親王ニ賜フ後紀日本

〔五年十二月十二日〕山城國宇治郡ノ公田一町五段三百歩ヲ左大臣正二位藤原朝臣緒嗣ニ賜フ後紀日本

〔六年八月廿四日〕攝津國島上郡ノ荒田九段ヲ以テ明經碩儒從四位下善道朝臣眞貞ニ賜フ後紀日本

〔八年十一月十七日〕山城國相樂郡ノ乘陸田三町ヲ橘朝臣清子ニ賜フ後紀日本

〔九年六月十五日〕攝津國島下郡ノ古荒田五十二町ヲ以テ從五位下大中臣朝臣岑子ニ賜フ後紀日本

〔清和天皇貞觀八年三月廿八日〕大和國平城京内ノ田地十六町三段二十七歩ヲ從四位下行山城權守在原

〔平城京〕今ノ奈
五ナリ

大日本國志 卷之四 大和國 三十一日

朝臣善淵ニ賜フ是ヨリ先キ善淵奏シテ言ス平城太
 上天皇ノ爲ニ精舍ヲ陵次ニ造リ舊京ノ荒地ヲ買ヒ
 得テ墾闢シテ田ト爲シ精舍ヲ修理スルノ資ニ宛テ
 奉ル而シテ内藏寮格旨ト稱シ收テ勅旨田ト爲ス請
 フ恩獎ニ賴テ永ク私田ト爲サント詔シテ之ヲ許ス
 三代
 實錄
 〔式〕凡ソ別勅田ヲ賜フハ其人ニ位ヲ授クレハ便チ位
 田ノ數ニ滿ツ職田亦同シ
 ○民政部式

賜地

〔按〕賜田ハ別勅人ニ賜フモノナリ是ヲ以テ之ヲ
 推スニ賜地亦別勅之ヲ賜フモノカ或ハ地ト云
 ヒ宅地ト云ヒ野ト云フ而シテ單ニ地ト云フモ
 ノ田亦其中ニ在ルモノ有リ概チ人臣ニ寵賜ス

〔道臣命〕大伴氏ノ遠祖日臣命ナリ其帝ノ師ヲ導クニ因テ名ヲ道臣命ト賜フ
 〔筑坂〕大和國葛市郡ニ在リ
 〔當麻蹶速〕大和國葛下郡當麻ノ人ナリ
 〔野見宿禰〕天武日命十四世ノ孫出雲國ノ人ナリ
 〔備力〕或ハ角力ト書ス後世ノ所謂相撲ナリ
 〔刑部親王〕刑部或ハ忍壁ニ作ルオサカヘト

ルモノ故ニ併セテ之ヲ收録ス

〔神武天皇二年二月二日〕天皇功ヲ定メ賞ヲ行ヒ道臣命ニ宅地ヲ賜テ筑坂ノ邑ニ居ラシメ以テ之ヲ寵異ス日本書紀

〔垂仁天皇七年七月〕當麻蹶速ト野見宿禰ト角力セシム二人相對立シ各足ヲ舉テ相蹶ル則チ當麻蹶速ノ脇骨ヲ蹶折キ又其腰ヲ踏折キテ之ヲ殺ス故ニ蹶速ノ地ヲ奪テ悉ク野見宿禰ニ賜フ是ヲ以テ其邑ニ腰折田アルナリ日本書紀類聚國史

〔交武天皇慶雲二年四月十一日〕三品刑部親王ニ越前國ノ野一百町ヲ賜フ續日本紀類聚國史

云フ天武天皇
第九皇子ナリ
長岡京拾芥抄
ニ云延暦三年
山城國長岡ノ
都ヲ營ム

大日本租稅志卷之四

〔桓武天皇延暦十八年八月二日〕長岡京ノ地一町ヲ民部少輔從五位下菅野朝臣池成ニ賜フ日本後紀
 〔嵯峨天皇弘仁六年四月八日〕攝津國住吉郡ノ地十町ヲ參議右大辨從四位上紀朝臣廣濱ニ賜フ日本後紀

大日本租稅志卷之四終

大日本租稅志卷之五

大藏權少書記官正七位野中準等修

公田

〔按田令〕義解ニ云位田賜田及ヒ口分田墾田等ヲ除クノ外ハ皆公田トス又云公田ハ乘田ナリ子ヲ以テ價トナスト乘ハ利ナリ口分等ニ配シナリ集解ニ云公田ハ賃租ヲ輸サス乃チ地子ヲ以テ價トナスト乘ハ利ナリ口分等ニ配シ利レルモノ即チ所謂乘田トス其收公田ノ如ク收ハレハ則チ公田ナリ此ニ編入ス

〔令〕凡ソ諸國ノ公田ハ皆國司郷土ノ估價ニ隨テ賃租

セヨ其價ハ太政官ニ送リ以テ雜用ニ宛テヨ令田
 凡ソ應ニ公ニ還スヘキノ田ハ皆主ヲシテ自ラ量ラ

大日本租稅志 卷之五 大藏權少書記官正七位野中準等修

〔養戸〕馬寮式ニ
飼戸アリ乃チ
養馬戸ナリ蓋
レ飼養訓同キ

シメ一段トナシテ退セ零疊シテ割キ退スコトヲ得
サレ先キヨリ零チタルコトアル者ハ聽ルセ田
凡ソ公私ノ田荒廢シテ三年以上ナルヲ能ク借テ佃
ル者有ラハ官司ノ判ヲ經テ之ヲ借セ隔越スト雖モ
亦聽ルセ私田ハ三年ニシテ主ニ還セ公田ハ六年ニ
シテ官ニ還セ限滿ルノ日ニ借ル所ノ人口分未タ足
ラサル者ハ公田ハ即チ口分ニ宛ルコトヲ聽ルセ田
○事荒損田條
中ニ具レリ
〔聖武天皇天平四年二月十五日〕故太政大臣ノ職田位
田養戸竝ニ官ニ收ム 續日本紀
〔八年三月二十日〕太政官奏ス諸國ノ公田ハ國司郷土

ヲ以テ通用ス
ルノミ拾芥抄
ニ大臣家管御
廢アリ別當之
ヲ字ル

〔所引〕續日本紀
所ノ字ナレ今
類聚國史ニ從
フ

ノ估價ニ隨テ賃租シ其價ヲ以テ太政官ニ送リ以テ
公廩ニ供セント之ヲ可ス 續日本紀 類聚國史

〔淳仁天皇天平寶字四年十一月七日勅〕云々七道巡察
使勘出スル所ノ田ハ宜ク所司ニ仰セテ地ノ多少ニ
隨ヒ全輸ノ正丁ニ量リ加フヘシ若シ不足ノ國アラ
ハ以テ乘田ト爲シ遂ニ貧家ヲシテ業ヲ繼キ憂人ヲ
シテ肩ヲ息ハシメン普ク遐邇ニ告ケテ朕ガ意ヲ知
ラシメヨ 續日本紀 類聚國史

〔按〕地ヲ班ツニ課戸ヲ先ニシ不課戸ニ後ニスル
コト例ナリ課戸ハ正丁アルヲ以テ今正丁不足
ノ國ハ乘田必ス多シ是レ以テ
テ貧困ヲ資クルニ足ルノミ

〔桓武天皇延暦十七年二月四日〕右京ノ人正六位上許

大日本... 卷之三

會部朝臣帶麻呂等言大和國廣瀨郡田疇數多クシ
テ灌溉水ニ乏シ伏シテ望ラクハ公田七町ヲ以テ堤
ヲ築キ池ヲ爲テ同ク公私ヲ利セン其功食等ハ並ニ
私物ヲ用ント之ヲ許ス類聚 國史

〔大同元年二月廿六日〕故從五位下箭集宿禰虫麻呂ノ

功田五町ヲ收ム養老六年律令ヲ刪定スルノ功ヲ以

テ賜フ所ナリ胤子無キニ依テ收ム日本後紀 類聚 國史

〔按〕功田ハ上下ヲ問ハス其主死シテ繼嗣無ク田

歸スル所ナキモノハ之ヲ官ニ收ム令集解ニ云

死スルノ日即チ其兄弟及ヒ姉妹ニ授クヘ

シ若シ無キ者ハ公ニ還スノミト是ナリ

〔平城天皇大同三年正月廿九日〕尾張國ニアル佐味親

王ノ壘田八町ヲ公田トナス民ノ爲ニ妨ケ有ルヲ以

〔佐味親王〕桓武
天皇第九皇子
ナリ

テナリ類聚 國史

〔嵯峨天皇弘仁四年二月十一日〕石見國ヲシテ兼田卅

町ヲ營ミ其獲ル所ヲ以テ故年ノ未納ニ填セシメ營

功ノ種子ハ正統ヲ借り充テ限ルニ三年ヲ以テス地

子ハ例ニ依テ之ヲ輸サシム日本後紀

〔清和天皇貞觀六年十一月七日〕是ヨリ先キ大和國言

ス平城ノ舊京其東ハ添上郡西ハ添下郡和銅三年古

京ヨリ遷テ平城ニ都ス是ニ於テ兩郡自ラ都邑ト爲

ル延暦七年都ヲ長岡ニ遷ス其後七十七年都城ノ道

路變シテ田畝ト爲レリ内藏寮ノ田百六十町其外私

竊ニ墾闢スル往々數アリ望請フ公ニ收メテ其租ヲ

大日本... 卷之三

輸サシメント之ヲ許ス 三代實錄 類聚國史

按公田ニシテ租ヲ輸スト

陽成天元慶五年正月廿六日淡路國ヲシテ乘田ノ

穀類四萬六千四百三十六束勘益田二百三十五町ヲ

稅帳ニ載セシム前守外從五位下伴連貞宗ノ申請ヲ

以テナリ 三代實錄

按乘田ハ時有テ増減アルヘシ今此文ヲ見ルニ

其穀其田此ノ如ク多シ蓋シ當時海島百事不便

人民鮮少王臣モ亦簡受ヲ望マス

醍醐天皇延喜十四年八月八日太政官符民部省尉家

去シ延喜十二年八月十三日ノ解ヲ得ルニ日ク式條

ヲ案スルニ位田國造田采女田簪力婦女田賜田等未

案内ノ上檢字
ヲ脱スルカ

授ノ間輸地子田タリ案内ニ元慶六年八月廿五日民

部省ニ下ス符ニ日ク大納言以上并ニ諸道博士畿外

无主職田ノ地子ハ正稅ニ混合ス又日ク關郡司職田

ノ地子ハ同ク正稅ニ混合ス又案内ニ七年五月十三

日諸國ニ下ス符ニ日ク尉家ノ解ヲ得ルニ日ク郡司

職田ノ地子元來無主ノ間地子帳ニ付シテ尉家ニ檢

納セシム而シテ去年八月廿五日其地子稻ヲ以テ正

稅ニ混合スヘキノ狀官符民部省ニ下サル省即チ符

ヲ諸國ニ下シ己ニ了ル今案内ヲ檢スルニ權官ニ任

スル者毎ニ過半榮爵ニ預ル者毎年兼任其位田公麻

田ハ乘レルヲ以テ充テ行ハル茲ニ因テ諸國ノ地子

頻ニ減少ト稱シ厨家ノ用途常ニ以テ闕乏ス望請フ
舊ノ如ク件ノ地子ヲ納レ以テ厨用ニ充ラン勅ス請
ニ依レ但民部省ノ符諸國ニ下知シ早ク返進セシム
而シテ年來ノ地子帳大納言以上諸博士等ノ職田ヲ
加注ス仍テ民部省ヲシテ其由ヲ勘申セシメテ云ク
太政官元慶六年ノ符旨ニ依リ大納言以上并ニ諸道
博士及ヒ郡司職田ノ地子ヲ以テ正税ニ混合スヘシ
省符諸國ニ下知シテ同七年ノ官符ニ依テ返進セシ
メ郡司田ノ地子ヲ以テ正税ニ混スヘキノ狀省符口
口爰ニ一符ニ載スルニ依テ兩色ヲ返進ス其後未タ
改給アラヌ式ニ依テ履行ス望請フ大納言以上并ニ

諸道博士无主職田元慶ノ符ニ依テ早ク下知セラレ
シ抑モ乘田ノ地子ヲ以テ年中例用ノ度ニ充ルノ遺
リ頗ル其數有リ然ラハ則チ前件等ノ田徒ニ地子田
ト爲シ混シテ其輸ヲ納メハ公ニ於テ損有リ厨ノ爲
ニ益无レ重テ望請フ件等ノ田ノ地子稻ヲ返進シ正
税ニ混合セン但關郡司職田ノ數時ニ隨テ増減シ定
數无シ此レ近年ノ帳ニ據テ勘申セシムヘシ采女田
ニ至テハ定額外无シ先補ノ輩格條ニ准據シ一身ノ
後无主田ト爲サン勅ス請ニ依レ

无主采女田冊八町

尾張國 六町 元三人ノ料田九町今一人ノ料田
三町ト定ム遺リ二人ノ料田六町

大日本... 卷之五

上總國 三町 格ニ載セス

下總國 六町 格ニ載セス

近江國 十五町 元八人ノ料田廿四町今三人ノ料田九町ト定ム遠リ五人ノ料田十五町

加賀國 六町 格ニ載セス

出雲國 三町 格ニ載セス

備中國 六町 元三人ノ料田九町今一人ノ料田三町ト定ム遠リ二人ノ料田六町

紀伊國 三町 元二人ノ料田六町今一人ノ料田三町ト定ム遠リ一人ノ料田三町

國造田四百一十一町五段

伊勢國 七町 尾張國 六町

參河國 四町六段 遠江國 十三町

駿河國 六町 伊豆國 六町

相摸國 十三町 武藏國 十二町

上總國 十八町 下總國 十八町

常陸國 十三町 近江國 八町

美濃國 廿四町 飛驒國 六町

信濃國 六町 下野國 六町

若狹國 六町 越前國 六町

加賀國 十一町 能登國 六町

越中國 十二町 隱岐國 一町八段

丹波國 六町 因幡國 六町

伯耆國 五町 石見國 十二町

美作國 六町

大日本... 卷之五

備中國十八町六段 備後國十八町

安藝國六町 長門國六町

淡路國六町 讚岐國六町

伊豫國六町 土佐國十一町五段

筑前國六町 筑後國十二町

豐前國六町 肥前國

肥後國十九町 日向國六町

壹岐國六町

齊力婦女田廿七町三段 參河國一町三段

尾張國二町 常陸國二町

下總國二町

美濃國二町 越前國二町

越中國二町 伯耆國二町

備中國二町 周防國二町

日向國二町

賜田八町 美濃國一町

下總國四町

因幡國三町

功田 播磨國九町六段七十二步

唐人田

信濃國二町四段

俘囚田廿三町四段二百步

上總國八町一段三百廿步

下總國五町二段二百四十步

備後國十町

因益田

近江國二町七段百四十步

關郡司職田千八百卅町八段

伊勢國 十八町 帳延喜九年所ノ

尾張國 二十二町 帳延喜七年所ノ

參河國 五十町 帳延喜十年所ノ

遠江國 二十八町 帳延喜八年所ノ

駿河國 六十六町 帳延喜七年所ノ

伊豆國 三町 帳延喜六年所ノ

甲斐國 卅一町八段 帳延喜八年所ノ

武藏國 廿四町 帳延喜七年所ノ

安房國 九町六段 帳延喜七年所ノ

上總國 八十八町四段 帳延喜三年所ノ

下總國 卅二町 帳延喜七年所ノ

常陸國 百五十二町 帳延喜八年所ノ

飛驒國 二町二段 帳延喜七年所ノ

信濃國 六十六町二段 帳延喜十年所ノ

上野國 八十六町 帳延喜六年所ノ

大日本和利... 卷之五... 七

安藝國	備後國	備中國	備前國	美作國	播磨國	越中國	能登國	加賀國	越前國	下野國
三町	廿四町	廿七町	□□	卅四町	廿五町	卅九町	卅町	□□	五十一町	八十六町
帳延喜七年所	帳延喜九年所	帳延喜八年所	帳延喜九年所	帳延喜八年所	帳延喜八年所	帳延喜五年所	帳延喜九年所	帳延喜六年所	帳延喜九年所	帳延喜七年所

筑前國	土佐國	阿波國	紀伊國	隱岐國	出雲國	伯耆國	但馬國	丹後國	丹波國	長門國
六十四町	四十二町	十五町	六町	十八町	六十八町	廿五町	廿二町	二町	十町	二町
帳延喜二年所	帳延喜二年所	帳延喜九年所	帳延喜八年所	帳延喜六年所	帳延喜七年所	帳延喜七年所	帳延喜七年所	帳延喜五年所	帳延喜九年所	帳延喜五年所

大日本和利... 卷之五... 七

本文算計、町合
セサルモノア
リ蓋レ原書ノ
闕誤ニ係ル

筑後國	八十八町	<small>寛平九年ノ帳注スル所</small>
豊前國	卅九町	<small>貞觀十三年ノ帳注スル所</small>
豊後國	廿八町	<small>元慶三年ノ帳注スル所</small>
肥前國	四十二町	<small>延喜二年ノ帳注スル所</small>
肥後國	廿五町六段	<small>昌泰六年ノ帳注スル所</small>
壹岐島	八町	<small>寛平九年ノ帳注スル所</small>

[按] 本文某々田ノ名稱ヲ以テ列舉セリ然トモ一切之ヲ公ニ收メ公田トナレルヲ以テ併セテ茲ニ收録ス

[同日] 同省ノ解ヲ得ルニ曰ク式條ヲ案スルニ云ク諸國ノ地子帳具サニ田ノ上中下及ヒ損益ヲ録シ止稅帳使ニ附シテ申送ス若シ去年ノ勘出物ヲ填セサレ

[將] 當ニ特ノ誤ナルヘシ

ハ稅帳ノ返抄ヲ拘留セン凡ソ乘田ハ上中下ノ品各等差アリ國司須ラク均ク其法ヲ置テ彼帳ヲ注進スヘシ而シテ上田ヲ置クコト少ク下田ヲ注スルコト多シ或ハ中下ヲ載セテ全ク上田ヲ脱ス之ニ因テ動スレハ地子ヲ減シ殆ト例進ヲ闕ク况ヤ官符用鎮シテ過進ト稱スルニ至ルヲヤ靜ニ事情ヲ檢スルニ國內ノ田何ソ必シモ下田ノ數多クシテ上田ノ數少カラシ是レ章程ヲ設ケサルノ漸ナリ望請フ國毎ニ七分ノ法ニ率シ將ニ田品ヲ置カン若シ上田ト率ヲ同フスルモノハ恐クハ習俗忽チ改メ難カラシ仍テ上田一分中田二分下田二分下々田二分ト注シ其帳ヲ

ナルヘシ

進メシメ上田ナキ國ハ中田二分下田二分下々田三分ト注進セシムヘシ若シ此法ニ違ハ、勘稅帳ヲ拘セン但未タ檢田帳ヲ進メサルノ國ニ至テハ先年ノ班符并ニ近年ノ租帳等ニ依テ勘申セシムヘシ然ラハ則チ彼帳ヲ進ムルノ日其數ヲ勘注スヘシ又自餘ノ雜田ハ國例ノ法ニ因テ特ニ彼帳ヲ進メシメン勅ス請ニ依レ政事要畧

〔年月關〕紀伊國ノ位田二町ヲ以テ乘田ト爲ス是ヨリ先キ彼國司言ス延曆二年九月一日勅ス但馬紀伊阿波三國公田數少ク班給スルニ足ラス而シテ王臣家競テ位田ヲ受ケ民ノ要地ヲ妨ク自今以後永ク停止

類聚國史若其
ニ云此章天皇
年月于支見ル
所ナレ文中紀
朝臣清子ハ承
和年間ノ人ナ

ニ從ヘ其先ニ授クル者ハ薨卒有ル毎ニ取テ乘田ト爲ヨト而ルニ勅シテ正五位下紀朝臣清子ニ給テ位田ト爲ス清子去年卒去ス望請フ乘田ト爲ント之ニ從フ類聚國史

公營田

〔按〕公營田ハ國衙ヨリ壯丁ヲ役使シテ公田ヲ營作スルモノナリ又太宰府ニ府儲田アリ營田ハ府儲ハ府廳ノ費用ニ給シ警固ハ非常ノ備ヘニ給ス信濃國ニ國府田アリ太政官ノ府用ノ田ナリ要スルニ皆人民ニ營作セシメ地子若クハ租ヲ納スル其餘ヲ以テ其衙ノ用ニ充ツ又軍人ニシテ營スル所以ハ則チ一ナリ故ニ併セテ此ニ收録ス

〔令〕凡ソ東邊北邊西邊ニ縁レル諸郡ノ人居ハ皆城堡
 ノ内ニ於テ安置セヨ其營田ノ所ニハ唯庄舎ヲ置ケ
 農時ニ至テ營作ニ堪フル者ハ出テ、庄田ニ就ケ收
 歛訖ラハ勒シテ還セ其城堡崩頽セハ當處ノ居戸ヲ
 役シテ閑ニ隨テ修理セヨ軍防令

〔按〕義解ニ云強壯ノ者ハ出テ、田舎ニ就キ老少
 ハ留テ堡内ニ在リ又云堡ハ土ヲ高フシテ以テ
 堡障ヲ爲リ賊ヲ防クナリ此レ守固ノ城ニ非ス
 故ニ居戸ヲ役シテ修理スト今之ヲ考ルニ一般
 ノ營田ハ官ヨリ人ヲ傭テ營マシム此ハ軍人ヲ
 シテ營マシム猶漢ノ趙充國ノ屯田ノ如シ而シ
 テ其營田タルハ則チ一ナリ

〔嵯峨〕天皇弘仁十四年二月廿二日太政官奏ス應ニ太
 宰府管内ノ諸國ヲシテ公營田ヲ佃ラシムヘキ事

九國ノ口分竝ニ乘田ヲ合セテ七万六千五百八十
 七町

口分田六万五千六百七十七町

乘田一万九百十町

應ニ割キ取ルヘキ佃一万二千九十五町國アコトニ

口分田五千八百九十四町

乘田六千二百一町

色ニ隨テ地子ヲ輸スヘシ而シテ府ノ解ニ總

テ輸租ト申ス宜ク本色ニ依ルヘシ

應ニ役スヘキ徭丁六万二百五十七人五人ニ一町ヲ作ル

右班田ノ歳百姓ノ口分及ヒ乘田水旱不損ノ田

ヲ擇ヒ取リ件ニ依テ割キ置キ公營田ト號ケ僑
 丁五人ヲ率トシテ一町ヲ營マシメ功並ニ食ヲ
 給フコト一ニ民間ノ如クシ正統ヲ以テ營料ニ
 充テ秋收ノ後本倉ニ返納シ國毎ニ乘田有ラシ
 メン若シ年中ノ益丁有ラハ隨テ亦割キ加ヘン
 村里ノ幹了ナル者ヲ擇テ各正長ト爲シ其堪フ
 ル所ヲ量テ一町以上ヲ預ラシメ田ニ縁ルノ事
 ハ總テ之ニ委任セン若シ風損虫霜ノ害ニ遭ハ
 實ニ依テ損ヲ免シ百姓ノ居ニ近ク各小院ヲ
 建テ獲ル所ノ稻ハ田租納官ノ兩色ヲ除ク以外
 ハ便チ此院ニ納レ出納シ易ラシメン

獲額五百五万四千一百廿束

三千六百二町町コトニ四 肥後國

八千四百九十三町町コトニ四百束

除三百九十七万三千六百九十九束國コトニ

佃功一百冊五万一千四百束町コトニ百廿束

租料一十八万一千四百廿五束町コトニ十五束

調庸料一百五十万七千七百九十束人コトニ廿束庸十束

僑丁食料七十二万三千八十四束人コトニ米二升

溝池官舎ヲ修理スル料一十一万束國コトニ

納官一百八万四百廿一束
 右目錄ナリ今納官ノ數論定ノ息利ニ超ユ須ラ

ク田租納官ノ二色糵ト爲スノ功ハ十束ヲ率ト
シ一束ヲ給シテ事ヲ成シ易カラシムヘシ
應ニ調庸ヲ免スヘキ事

課丁六万二百卅人 九國各
數アリ

全輪三万二百九十九人

半輪三万九千九百卅一人

調庸額ニ准スルニ一百五十万七千七百九十
束

右課役ノ民ハ率テ貧窮多シ調庸ヲ備貢スルコ
ト極メテ大難トス逃亡ノ由更ニ亦他無シ今須
ヲク調庸ハ夏月ニ正統ヲ以テ寛價ヲ充テ而シ

テ交易シ秋收ノ後營田ノ獲ヲ以テ返納スヘシ
夫レ貧乏ノ民ハ夏月ニ調庸等ノ物ヲ作ル一食
無キニ迫リテ直ヲ減シテ賣リ失ヒ貢調ノ口ニ
臨テ更ニ價ヲ倍シテ買ヒ求ム民ノ大弊ナリ故
ニ此議アリ

應ニ徭丁ノ糶ヲ給スヘキ事

徭丁六万二百五十七人 人コトニ卅
日ヲ役ス

料稻七十二万三千八十四束 九國各
數アリ

右貧下ノ民ハ朝夕ヲ給セス身公事ニ當リ且ツ
求メ且役ス飢餓ノ輩十ニシテ七八六リ今商量
スルニ營田ノ獲ヲ以テ件ニ依リ充テ給セン

應ニ池溝官舎ヲ修理スル料ヲ置ヘキ事

料稻一十一万束九國各差アリ

右百姓減少シ破壊彌多シ徭帳ヲ計算スルニ國

毎ニ餘リ無シ今商量スルニ件ノ料ヲ置テ將ニ

役夫ノ功食ニ充テシ其料モ亦獲稻ヲ用フヘシ

太政官去シ二月廿一日ノ論奏ニ曰ク參議太宰大貳

從四位下小野朝臣峯守ノ表ヲ案スルニ曰ク方今類

年稔ヲス雜ルニ疫病ヲ以テシ臣カ忝フスル所ノ道

非常ニ害セラル賑恤數加ヘテ府庫稍罄キ寛政頻ニ

行ヘトモ民猶足ラス比屋燹炊ノ烟無ク連戶荒涼ノ

門多シ斯ニ因テ賦ヲ薄フシ徭ヲ省カハ既ニ公用ニ

支フルコトヲ闕ン常ヲ守テ民ヲ實メハ輸貢ノ責任
 フルコト無ケン變治アルニ非スンハ恐クハ興復シ
 難カラシ臣常制ヲ變易シテ輒ク新議ヲ上ル事ノ由
 趣ハ表右ニ具レリ既ニ調庸ヲ免シ兼テ糧食ヲ給ヘ
 ハ民ニ於テ優ナリト爲ス伏シテ去シ正月廿七日ノ
 勅ヲ奉スルニ岑守便宜ヲ言フ所議定シテ奏聞セヨ
 ト臣等商量スルニ試ニ四年ヲ限リ件ニ依テ之ヲ行
 ハシメン謹テ以テ申聞ス類聚三

〔按〕本文ノ計算ヲ案スルニ獲額五百五万四千一
 百廿束内三百九十七万三千六百九十九束ヲ以
 テ佃功及ヒ租調庸係丁溝池官舎ヲ修理スルノ
 料ニ充テ殘額一百八万四千二百一十束ヲ納官
 ノ物トス米ニシテ五万四千二百一十斛五升乃チ
 太宰府ヲ此田營作シテ獲ル所ナリ是レ政府ニ

損無クシテ府ニ益アリ凡ソ公營國營皆此類ナ
 リ是レ古ハ良田剩リ有テ優ニ此法ノ行ハルモ
 コト知ルヘシ此文未ニ勅云々ノ語無シ然トモ
 原文ノ末ニ聞ノ字ヲ特書ス太政官ニ於テ決議
 上奏シテ之ヲ施行セシコト知
 ルヘシ因テ特ニ之ヲ掲録ス

〔文徳天皇齊衡二年十月廿五日太政官符〕太宰府去シ
 二月廿六日ノ解ヲ得ルニ曰ク肥後國ノ解ニ曰ク府
 去シ嘉祥三年十月四日ノ符ニ依ルニ營田ノ期ハ去
 年限滿ツ今年須ラク停ムヘシ而ルニ澆季ノ民窮弊
 殊ニ甚シ若シ營田ノ利潤無クンハ必ス調庸ノ輸貢
 ヲ闕ン望請フ當年ノ間ハ舊ニ依テ營マシメン府解
 狀ニ依テ且行ヒ且言スト今案内ヲ檢スルニ云々田
 ヲ營ムニ堪ヘサル國アラハ狀ヲ具シテ申請ヘ
 三 代

格

〔清和天皇貞觀十五年十二月十七日〕太宰府言ス弘仁
 十四年二月二十一日ノ格ニ依ルニ管内ノ諸國始テ
 公營田ヲ置ク而シテ筑前國耕作數年即チ以テ停止
 ス其由緒ヲ尋ルニ土地薄瘠獲輸數多ナルニ緣ルナ
 リ今須ラク班田ノ日良田九百五十町ヲ擇ヒ土浪人
 ヲ論セス頒チ充テ、耕佃セシムヘシ夏時正稅ヲ以
 テ調庸ヲ買ヒ備ヘ秋日獲稻ヲ以テ本倉ニ填納セン
 然ラハ則チ百姓徵責ノ酷ヲ免レ貢賦逋懸ノ煩ヲ絶
 ン又府ノ隣敵ニ備フル其來ル逸代ヨリス而シテ去
 シ貞觀十一年新羅ノ海賊竊ニ間隙ヲ窺ヒ貢綿ヲ掠

損無クシテ府ニ益アリ凡ソ公營國營者此類ナ
 リ是レ古ハ良田剩リ有テ優ニ此法ノ行ハルハ
 コト知ルヘシ此文末ニ勅云々ノ語無シ然トモ
 原文ノ末ニ聞ノ字ヲ特書ス太政官ニ於テ決斷
 上癸シテ之ヲ施行セシコト知
 ルヘシ因テ特ニ之ヲ掲録ス

〔文徳天皇齊衡二年十月廿五日太政官符〕太宰府去シ
 二月廿六日ノ解ヲ得ルニ曰ク肥後國ノ解ニ曰ク府
 去シ嘉祥三年十月四日ノ符ニ依ルニ營田ノ期ハ去
 年限滿ツ今年須ラク停ムヘシ而ルニ澆季ノ民窮弊
 殊ニ甚シ若シ營田ノ利潤無クンハ必ス調庸ノ輸貢
 ヲ闕シ望請フ當年ノ間ハ舊ニ依テ營マシメシ府解
 狀ニ依テ且行ヒ且言スト今案内ヲ檢スルニ云々田
 ヲ營ムニ堪ヘサル國アラハ狀ヲ具シテ申請ヘ
 三類聚代

格

〔清和天皇貞觀十五年十二月十七日〕太宰府言ス弘仁
 十四年二月二十一日ノ格ニ依ルニ管内ノ諸國始テ
 公營田ヲ置ツ而シテ筑前國耕作數年即チ以テ停止
 ス其由緒ヲ尋ルニ土地薄瘠獲輪數多ナルニ緣ルナ
 リ今須ラク班田ノ日良田九百五十町ヲ擇ヒ土浪人
 ヲ論セス頒チ充テ、耕佃セシムヘシ夏時正稅ヲ以
 テ調庸ヲ買ヒ備ヘ秋日獲稻ヲ以テ本倉ニ填納セン
 然ラハ則チ百姓徵責ノ酷ヲ免レ貢賦逋懸ノ煩ヲ絶
 シ又府ノ隣敵ニ備フル其來ル邈代ヨリス而シテ去
 シ貞觀十一年新羅ノ海賊竊ニ間隙ヲ窺ヒ貢綿ヲ掠

〔鴻臚〕 蕃人ノ舍
ル部ナリ
〔統領〕 軍兵ヲ統
帥スル者
〔選士〕 戦士ノ精
選シタル者

奪ス斯ヨリ甲冑ヲ運シテ鴻臚ニ安置シ俘囚ヲ差
發シ分番シテ戎ヲ鎮シ重テ復々統領選士ヲ分置シ
テ之カ警守ニ備フ今用フル所ノ糧米有數ヲ闕クコ
ト無ク出納ノ事勾當ナキニ非ス如シ朝夕米鹽ヲ資
給スルノ煩多キヲ以テ仍テ書生駈仕等ヲ差シ置キ
口ヲ計テ貧ニ給ヒ番ヲ結テ宿直セシメハ自餘ノ色
類ニ觸テ猥雜ナリ件ノ國女子ノ口分ヲ割テ公營田
ヲ置クモ遺ス所ノ田猶他國ニ倍ス須ラク一百町ヲ
分チ置キ警固田ト名ケ其耕營ノ如キハ輸ス所ノ地
子ヲ收メ年中ノ雜用ニ充ツヘシ但地子ヲ相割キ因
テ例ニ准シテ進納セン又府儲ノ料稻總テ三萬束凡

ソ使糧竝ニ水脚賃及ヒ厨家ノ雜用凡百ノ庶事總テ
其中ニ在リ諸國備フル所各色數有リ而シテ或ハ期
ニ違フヲ致シ或ハ未進ヲ置キ府中ノ用常ニ闕乏ス
須ラク田二百町ヲ割キ置テ府儲田ト名ケ其地子ヲ
收メ以テ府用ニ充ツヘシ但租穀ハ上ニ同フセン請
ニ依テ之ヲ許ス 三代實錄
〔光孝〕 天皇仁和元年二月八日信濃國ニ乘田三十町ヲ
以テ國府ノ佃ヲ營スルヲ聽ルス但其地子ハ例ニ任
セテ太政官ノ廚ニ進納セシメ永ク以テ例ト爲ス彼
國ノ營佃此ヨリ始ル 三代實錄

大日本租稅志卷之五終

正誤

第四卷

第十五張左第十行

〔關〕〔關〕ノ誤

第十六張左第三行

〔テ〕〔ヲ〕ノ誤

第五卷

第十三張左第十一行

〔ヲク〕〔ヲク〕ノ誤

第十五張右第十一行

〔二百十斛〕〔三十一斛〕ノ誤

田〔此田ヲ〕ノ誤

ノE才利物志
正
言
一
十
九
年
第

